

戦で大黒柱をなくした家族

佐賀県神埼郡神埼町 古沢 諒子

太平洋戦争、この戦は私にとって生涯、忘れることは出来ません。私の父は、私が4歳の時に召集されて満州（現在、中国東北地方）へ行きました。その頃母は病気で、年老いた祖母が農業の仕事をしていました。私達は小さくて手がかかり、祖母は大変でした。秋の稲刈が済んだ頃、突然、父が帰還して来ました。父は休む間もなく、田んぼの真ん中にある畑の土を一輪車で運び、田んぼの隅に寄せる仕事をしていました。その頃母は実家へ帰り、養生をしていました。母の実家は近かったので、体調の良い時には父が仕事をしている所へ、おやつ等持って行く母について行くこともありました。

母は、道中に咲いている草花を摘んでは、花の名前を教えてくださいました。こんな一時が私にとって一番楽しく幸せでした。両親とおやつを食べたり、お話をしたあの日を思い出す時、本当に夢のようです。お父さんにとっても和めたひとときだったと思います。

やっと整地が済み、麦を蒔き、翌年の初夏には麦を刈り、今度は田植えの準備をし、田植えが済み、一息つく暇もなく、再び召集令状が来ました。私は父が出征していく日から、伯母の家に引き取られることになりました。家には祖母と妹が残りました。こんな状況の中、戦地に行かねばならない父でした。せめて母なりと健康でいて、私達と一緒に暮らせたなら良かったけれど、父は田植え後の疲れで痩せこけた身体。病人のような姿で軍服を着ていました。

南天の枝に日の丸の旗を付けてもらい、それを持って神埼駅へ皆で見送りに行きました。母も、実家の祖父母がリヤカーに乗せて、連れて来てくれました。父は汽車に乗る前に妹と私をしっかりと抱きながら、「良い子になれよ、しっかり頑張れよ」と、涙をこらえながら言いました。その後、伯父、伯母に「子供達の事を頼みます。それから家の事、老いた母を頼む」と言いました。間もなく汽車が動き出して、遠くに見えなくなるまで、父も私達も手を振っていました。

その後、父は久留米の営所にいる事を聞きました。父は秘密部隊だったそうです。面会は出来ない。それでも、伯父夫妻は私を連れて久留米の営所へ行きました。行く時、帰る時、空襲にあい、汽車もバスも動かなくなりました。こんな時、伯母は私をおんぶして歩き、夜中近くに家に着くこともありました。

3回目の面会に行く時、道路端の畑に真っ赤に熟れたホウズキがありました。私はホウズキが欲しくて、伯母は畑の主を探すなどして、ホウズキを分けてもらったり、大変困らせた日もありました。

最後の面会時、父は「今日は諒子は連れて来んやっただかい」と、伯母に言ったそうです。伯母は「連れて来んでごめんね。腰が痛かったのも、もし、おんぶせねばならん事になった時どうしようもないから、連れて来なかった」と言ったそうです。

伯母は父に、「帰って来れん事はないだろうが、もしものとき古沢家の跡継ぎは誰にしたが良かね」と聞いたそうです。父は「姉さん、その時は諒子を家に置くように」と頼んだそうです。伯母が父と交わした言葉の最後となりました。

その2日後に父は、日本を離れて、南方ボルネオの激戦地へ行ったそうです。

この頃戦々は激しく、私達の周囲にも爆弾が投下されて、道路や水路にも不発弾が落ちていました。小学生が不発弾を触り、即死するような事もありました。父の出征後は、年老いた祖母が水田の管理をすることになりました。

旱魃(かんばつ)で水が足りず、祖母は、ちっちゃな身体で重い水車を担ぎ、畦道をこけそうになりながらも、水車を水口まで運んで行っては据え付けて、水田に水を張っていました。

この頃肥料も不足がちで、祖母は朝早くから大八車を引いて民家の肥やしを貰いに行き、肥料の補充をしていました。秋には収穫期が来たものの、ホッとすることは出来ませんでした。割当お米の完遂が出来ません。どうしても二俵ほど足りません。「困った、困った」と呟いている祖母。父が出征する時、集落の人達は「後の事は心配せんでよか。安心して奉公して来てください」と言い、優しい言葉をかけて父を送ってくれたのに、この時、集落の人達は足りないのがおかしいみたいなしぐさで、協力など全くしてくれませんでした。

祖母は、祖母の実家である千代田町へ頼みに行きました。そしてやっと完遂することが出来ました。あんなに頑張ってお米作りに励んでいたのに、毎日食べる食事は、芋がゆばかりでした。芋ばかり食べる日もあったようです。男手もなく、独りで何もかもやってきたのに、本当に可哀相なおばあちゃん。悲しい事、悩み事ばかりで、本当に気の毒でなりませんでした。

昭和20年、8月には、広島、長崎に原子爆弾が投下され、たくさんの方が亡くなりました。それから間もなく終戦の日を迎えました。

翌年4月に、私は小学校へ入学することになりました。入学する時、父の消息は分かりませんでした。近くの兵隊さんは少しずつ帰って来られているのに、私の父はまだ帰って来ない。小学校へ入学する時、私は伯父に付き添われて初登校しました。

暑い小麦刈の最中、一通の手紙が来ました。伯母はその手紙を持って、祖母が麦刈をしている所へ私を連れて行きました。その手紙は戦死の公報でした。

祖母は私の手を握り「諒子ちゃん、もう父ちゃんは帰って来んよ」と言いながら、畦に腰を下ろし、涙をあふれんばかりにため、すっかり氣力をなくしてしまいました。その時の祖母の姿、父の帰る日を待ちに待っていたのに……。祖母はその翌年に他界しました。

その後、妹も伯母の家に引き取られました。父は南方ボルネオ島で、享年32歳で南国の星と散りました。母との離別、本当に辛い事ばかりで生涯を終えた父。父の留守中をしっかりと守ってくれた祖母。少しも田んぼを減らす事もなく、私達に残してくれた祖母。伯母の協力。古沢家に私と妹を残して逝った父。

私は青春時代、少し灰色だった。ひねくれっぽくなった事もありましたが、父、祖母を思い出し、今の苦勞など苦勞に入らぬと自分に言い聞かせ、早く古沢家に帰り、立て直すことが私

に課せられたものだ、頑張らなくてはと考えると、仕事をしっかり覚えました。

昭和39年の早春に養子を迎えました。やっと我が家に、灯をともす事が出来ました。翌年の元旦に長女が誕生。昌子と名付けました。その年の3月、妹が嫁ぎました。その翌年、長男誕生。今は亡き人達、在りし日の祖母、父の事、戦争の事を話し聞かせています。

今日は祖母の命日で6月4日、長男が美しい百合の花を貰って来ましたので、祖母の仏前にプレゼントしました。何だか、仏壇の方がにぎやかになってきたような気がします。祖母の声、それに父の声が聞こえてくるような気がしてなりません。

夜には妹もお参りに来るでしょう。お父さん、それに年にもめげずに頑張ってくれたおばあちゃん、御苦労様でした。本当にありがとう。50年過ぎても、父、祖母は、私の中に生きています。